

〔資料〕

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

宗 像 和 重

A List of correspondence columns of
The Yomiuri Shinbun(1881—82)

Kazushige Munakata

明治・大正期の「読売新聞」が、“文学新聞”と称されるほど充実した文芸欄を誇り、近代諸作家の重要な作品発表舞台であったことは、贅言を要しない。特に近年は、マイクロフィルム（日本マイクロ写真株式会社製作販売）によって、明治7年(1874)11月創刊以来の全期間にわたる閲覧が可能となり、その全体像を解明しようとする試みが進んでいる。明治34年(1901)から大正末年(1926)に至る文芸作品・関係記事を採録した紅野敏郎編『読売新聞文芸欄細目』上下（日外アソシエーツ、昭和61年7月）、同じく明治19年(1886)から27年(1894)までを対象とした平田由美編『明治中期読売新聞文芸関係記事目録』（「京都大学人文科学研究所調査報告」第36号、平成元年10月）が公刊されていることも、周知のところであろう。これらを通して、近代文学研究の第一級資料としての「読売新聞」の調査検索に、一層の便宜が与えられたことの意義は、きわめて大きいと言わなければならない。

ただ、上記両目録の採録範囲が示すように、これまでの「読売新聞」への関心は、おおそ坪内逍遙『小説神髓』（明治18～19年）を起点とする、近代文学成立期以後に向けられており、それ以前の紙面に注意が向けられる機会は、必ずしも多くなかったように思われる。もとよりそれは、明治10年代後半までの紙面に、見るべき文芸関係記事がほとんどないことによるのだが、先に私は、拙稿「投書家時代の森鷗外—『読売新聞』投書欄の再検討—」（「文学」昭和61年10・11月）、「坪内逍遙の『読売新聞』第一作—『読売新聞』投書欄の再検討—」（「国文学研究」昭和62年3月）等において、鷗外や逍遙の初期文筆活動の再考を試みる過程で、明治10年代中期の「読売新聞」投書欄が、『読売新聞百年史』（読売新聞社、昭和51年11月）に言うところの「近代文学勃興に先立つ過渡期の文壇、あるいは新進作家の訓練場としての役割」を担っていた

事実、あらためて注目せざるを得なかった。

たとえば森鷗外については、その投書欄初登場が、明治14年(1881)9月17日に「千住 森林太郎」の名で掲載された「河津金線君に質す」であることが、従来から知られている。これは、大学卒業直後にあたる数え年20歳のことであって、公に発表された鷗外の最初の文章でもあるのだが、諸種の年譜によれば、彼の名前が再び「読売新聞」に登場するには、ドイツ留学から帰国後の「日本家屋説自抄」(明治21年12月5・6日付)や「小説論」(明治22年1月3日付)まで待たなければならない。すなわち、鷗外の初期文筆活動は、飛び抜けて早い明治14年の「河津金線君に質す」一編のみを例外として、ドイツ留学直後のいわゆる“戦闘的啓蒙批評”をもって開始される、というのがこれまで理解されていた鷗外像であった。

しかし、上記の拙稿において論証を試みたように、実際は「河津金線君に質す」に続く明治14年10月から翌15年8月まで、鷗外は匿名の「千住 無丁老農(無丁翁, 無丁, 無丁子)」及び「千住 不識个庵主」名義で、10編に及ぶ文章を「読売新聞」投書欄に寄せており、当時の有力投稿者として遇されていた時期があったと思われるのである。しかもそれらは、大学卒業から陸軍出仕前後の従来の年譜の空白を埋め、一人の青年が書生から軍人に変貌していく過程を生々しく証言する資料であると同時に、後の“戦闘的啓蒙批評”の揺籃時代とも称すべきさまざまな萌芽が含まれている点からも、重要視せざるを得ない。従来考えられているようなドイツ留学とその直後ではなく、この明治14年から翌年にかけての一時期にこそ、鷗外文学の起点を定めることが要請されるのであって、この時期の「読売新聞」投書欄が「新進作家の訓練場としての役割」を果たしていた典型的な例を、鷗外に見ることができるのである。

ここで再確認しておけば、活版印刷所日就社を発行所とし、明治7年11月2日に隔日刊(翌年5月より日刊)で創刊されたのが、「読売新聞」である。半紙大2頁の創刊号は、「布告」「新聞」「説話」「稟告」の四欄で構成されていたが、その「稟告」に「此新ぶん紙は女童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす趣旨でござりますから耳近い^{ためになる}有益ことは文を談話のやうに認め御名まへ所がきをしるし投書を偏に願ひます」というように、積極的に投書を募って「^{はなし}投書」欄(のち「^{よせぶみ}寄書」欄と改称)を新設し、やがてこの欄は、平談俗語を旨として大衆化路線を敷いた「読売新聞」の呼び物となっていく。再び『読売新聞百年史』の記述を借りれば、「小新聞としての大衆的、江戸的カラーは、当時の本紙の大きな特色であって、これが多数の文人墨客を読者としてひきつけ、明治10年代中ごろの寄書欄は空前のにぎわいを呈」することになるのである。

しかし、先の鷗外の例が示すように、当時の投書のほとんどが匿名で掲げられていることや、その題材が必ずしも文芸に関するものとは限らない（むしろ、そうではない日常茶話の類がほとんどである）こともあって、この「空前のにぎわいを呈」していた時期の投書家の実態は、まだ十分に解明されているとは言い難い。鷗外の他にも、坪内逍遙、斎藤緑雨、山田美妙、徳富蘇峰ら、近代文学の先駆者の多くが、この投書欄によって文筆活動の第一歩を記したことは知られているが、なお精査すれば、実際に彼らが投じた文章は知られている以上に多いであろうし、それ以外の新たな投稿者が浮かび上がる可能性も少なくないであろう。ひいては、近代文学成立期の様相を明らかにするためにも、この「近代文学勃興に先立つ過渡期の文壇」の調査検討が不可欠であると思われる。ここに、当時の「読売新聞」投書欄の目録を編む所以である。

*

目録に先立って、いくつか凡例的なことに触れておきたい。本来なら、明治7年の創刊時から編むべきであるとも思うが、それを14年からとしたのは、私の主たる関心がこの年から文筆活動を開始する森鷗外にあることと、投書欄が「空前のにぎわいを呈」することになる、その発端に位置するように思うからである。「読売新聞」そのものが、この新年から紙幅を拡張して記事量を大幅に増加し、「従来に比べて格段と重みのある新聞に成長した」（『読売新聞百年史』）ことも、付記しておきたい。もとより、必要に応じて、13年以前も対象にすることを考えている。なお、今回の対象を翌15年までとしたのは、専ら紙数の都合による。

通常は第三～四面（最終面）に掲載されている投書欄（当時の名称は「寄書」欄）の採録にあたっては、冒頭に「寄書」と記し、続いて表題、住所、筆名の順で記載した。「○河津金線君に質す 千住 森林太郎」という形で表題、住所、筆名が記され、続いて本文に入るのが当時の投書の一般的なスタイルであるが、表題や住所はしばしば省略され、筆名も末尾に記載されることがある。このうち無題の投書はその冒頭部をくゝで掲げ、同日に二編以上掲載されている場合には／で区切った。ちなみに、各年年頭の「配り初めの附録」とは、寄稿家や社員による新年の祝詞を特集した、四面にわたる別刷り付録である。

これら投書欄に加えて、後の論説欄にあたる第一面の「読売雑譚」欄を「雑譚」として採録した。明治12年(1879)から設けられている欄だが、この年から湊上漁史成島柳北が請われて登壇し、常連執筆者になっている。その初日にあたる明治14年1月4日の文章「福の神」に先立って、柳北が記した前文を以下に掲げておく。「日就社長子安君は余の莫逆なり常に隔て無く語らふより暇有れば共に酒酌みて遊ぶに余は必ず

痛く酔ふて快論劇談するを他の人々は忌み嫌へど子安君は特に面白しとて興ぜられぬ
 去年重き病に罹りて後余は飲を廃せしかば君と遊ぶごとに例の論談も出ず唯だ興高け
 れば筆執りて種々の事を心のまにまに書き綴る事とはなりぬ君亦之を愛で、書くごと
 に我れに得させよ我が新聞紙に載て看客の一餐に供せんと云はる酒宴の席上にて綴り
 し文を江湖の看覧に入れん事は最愧かしき事にしあれど君の新聞にかゝん恥は余の恥
 に非ずと思ひて君の心に従ひぬ左はいへ余が拙き言葉の或は童蒙の教草ともなる事あ
 れば余は己れが恥となるも亦敢て辞せざるなり唯余は君と遊ぶこと多き時は書く文も
 多く遊ぶこと少なき折は文も亦少なければ其数の多少は始めより定め難き事ぞかし。
 なお、〔寄書〕〔雑譚〕のほか、雑報の「新聞」欄から採録した署名記事がある（明治
 14年7月21・23日）。これを含めて、明治14・15年の署名記事はすべて採録したこと
 になる。

当時の休刊日は原則として月曜だが、それ以外にも年末年始の休刊や、マイクロフ
 ィルムに欠号がある場合もある。また刊行日でも、〔雑譚〕〔寄書〕がいずれも不掲載
 の日もあるが、それらについてはいちいち断らず、日付を略した。念のため、日付に
 続いて曜日を記してある。

『読売新聞百年史』には、「十四年から十七年までの本紙の常時的投稿家」として、
 谷村要助（南新二、北古三）、中川真節（中坂まとき）、鈴木利平（幸堂得知、東帰坊）、
 岡本長之（浣華翁）、倉田恭英（柳洲亭藍江）、三品蘭溪（柳条亭華彦）、篠田久次郎
 （二世笠亭仙果）、杉山幸次郎（琴通舎康楽）、高田貞三（霄指堂子仙）、伊東専三（伊
 東橋塘）、前島和橋（九世川柳）、富田一郎（夏暁）、鹿島万平（紅葉亭鹿成）、野田千
 秋（高島屋塘雨）、会田皆真（活東舎）、渡辺晴雪（可愛楼晴雪）、田島象二（醉多道
 士）、金井雄得（かな井安善）、山田孝之助（風外、籟生）、石井滝治（南橋）らの姓
 名（筆号）が挙げられ、さらに「次代文学の先駆をなした若手」として、坪内逍遙
 （春のやおぼろ、蓼汀迂史）、山田美妙（樵耕亭蛙船）、斎藤緑雨（江東・可笑子）、中
 西梅花（落花漂絮）、森鷗外（千住・森林太郎）、遅塚麗水（水戸孤客・遅睡庵）らが
 挙げられている。これらの確認や同定、および内容にわたる検討については、投書欄
 の全体像を見極めたりえて別稿を用意することとし、今回は誤植と疑われるものを含
 めて、ほぼ紙面掲載の形のまま採録するに留めた。また編者による注記を*で記した
 が、これも必要最小限に留めた。その意味で本稿は未定稿であり、「目録稿」とした
 所以である。

明治14年（1881）1月

4 火〔雑譚〕福の神 澤上漁史

〔配り初めの附録〕新年の口上 社員 加藤瓢乎／梅花下偶吟二種＜＊漢詩＞ 柳北仙人／明治十四年一月一日作＜＊漢詩＞ 青邨主人広瀬範／辛巳新年＜＊漢詩＞ 亀谷省軒／同＜＊漢詩＞ 加藤秋爽／同＜＊漢詩＞ 南橋散史／＜新年の景物は＞ 前島和橋／富貴といふも草の名冥加といふも草の名＜＊各一句＞ 鹿山人・梅老・梅亭・楽山・静亀・大洲／諸君の祝章を多く寄せられしを喜びて＜＊一句＞ 藍泉／新年人事＜＊各一首＞ 多麻園・松寿翁・岩上亭・筑波庵・在明亭・五葉園・七面堂武昇・雪の舎豊・亀の舎調・松風舎琴や・千松亭琴高・会津舎杏村・新井賛碎・水西園久子・宮内しつか・佐野るみ子・坂本頼翁・秋琴亭緒依・関根桃洲・千種庵秋吉・蟹の舎左文・琴通舎康楽・立斎広重／西京の花＜＊一句及び祝詞＞ 南新二／大坂の月＜＊一句及び祝詞＞ 幸堂得知／東京の雪＜＊一句及び祝詞＞ 大久保紫香／読売新聞の紙面改革を祝す 苔の屋一心／＜年々歳々の祝詞は＞ 東喜坊／新年祝詞 富士見町 小倉机友／狂句＜＊各一句＞ 義母子・東雄・要□・莊□・氷□・寿鶴・吞七・きまり・混々舎・楽眼・天狗・糸耕・仙果・柳袋・一徳／扇の記 渡辺晴雪／吉例の祝辞 高島屋塘雨／新年霞＜＊一首＞ 高崎正風／新年梅＜＊各一首＞ 藤波教忠・藤井行道・松平忠敏・星野千之／新年鶴＜＊一首＞ 鈴木重嶺／新年鶯＜＊一首＞ 三田葆光／新年海＜＊一首＞ 松平親貴／新年＜＊一首＞ 毛利元敏／新年松＜＊一首＞ 小俣景德／読売新聞をく＜＊各一首＞ 鶴園久子・松の門みさ子・小原燕子・小出榮／新年衣＜＊一首＞ 山田貞亮／読売新聞をく＜＊各一首＞ 大野定子・酒井高子・岡野伊平／巳のとしの初刷を祝す 若村黛／＜吉語に曰く春桃李を樹る者は＞ 中坂 まとき／＜貴社新聞の繁盛なるは＞ 越中泊駅 小沢藹石／迎新年 社員 饒庭篁村 ＊□は判読できない文字

6 木〔寄書〕＜弓張つけし負債の敵を＞ 南品川 北村和三郎／＜上見れば及ばぬ事の多くと＞ 四谷 門脇五連

7 金〔寄書〕＜偕はや皆さん明まして＞ 下谷の 通新舎／鼠を憎む文 高島屋塘雨／読売新聞 発売祝 梅花亭薫・春日園三藤／＜玉を鑲ばめ錦を飾る＞ 牛込 鼓腹菴狸々

8 土〔寄書〕猫を箴む 桜田本郷坊 康齋老人／風を仕舞置く発明者の話 中坂まとき

9 日〔雑譚〕貧乏神 澤上漁史 〔寄書〕鏡に向ッての小言 晴雪生／＜僕一日詠歌の師を訪ひしに＞ 礪川 狸々生／＜夫婦一対といふは＞ 鹿山人

11 火〔寄書〕＜爰に若き夫婦あり＞ 下総八日市場 小松生／棒尽しの説 浣花翁

12 水〔寄書〕空はなし 鹿山人

13 木〔寄書〕我がふりを見る可し 中坂のまとき／＜礼儀正しければ＞ 華睡庵塘雨

14 金〔雑譚〕新居新年会の頌詞 澤上漁史 〔寄書〕将碁の賛 晴雪生記

15 土〔寄書〕＜或朋友が兎角遊び好で＞ 南新二／＜一月十二日社に参じ＞ 亀戸 三巴窓立命／竹有佳色＜＊各一首＞ 内田美堯・平野松寿翁・東明亭月守・琴通舎康楽

16 日〔寄書〕新年の述懐 下谷の通新舎

18 火〔雑譚〕子安君新年宴会の祝詞 放誕子

宗 像 和 重

- 19水〔寄書〕〈いづれの里なりけん〉 中坂の まとき／大笑ひ 鹿の武太郎
20木〔寄書〕口の用心 富士見町 小倉机友／〈猿に木登りを教ふる勿れとは〉 亀島町 木村
富三／〈人を見て法を説とは〉 竹窓閑人
21金〔寄書〕便桶の辞 南新二／〈今世俳諧に遊ぶもの〉 神田丹前 遊蕩子／運と解 晴雪
渡辺生運筆
22土〔雑譚〕雪後の小言 放誕子 〔寄書〕〈親友の中にも〉 亀島町 木村富三／宝船みな目
さめ 羽後国雄かちの山源
23日〔寄書〕〈ある人汁粉餅の〉 下総八日市場 小松戯稿
27木〔雑譚〕友は第二の我 澤上漁史 〔寄書〕〈昔長者ありて〉 東喜坊
29土〔寄書〕〈昔時の樗蒲句連祭文の〉 外神田 金井安善／虚言はじめ 二勿庵 大江あやみ

明治14年(1881) 2月

- 1火〔寄書〕〈昔の人の言に〉 まとき漫筆
2水〔雑譚〕ひとりもの 澤上漁史
3木〔寄書〕三鳥の伝 東喜坊
4金〔寄書〕洋燈の感 二勿菴 大江あやみ誌
5土〔寄書〕〈旧幕府の時代〉 外神田 金井安善
6日〔寄書〕金儲は色女を拵へるが如くせよ 木村富三／〈両国橋の上を〉 梶野鉄哉
8火〔寄書〕三鳥の伝(稲負鳥) 東喜坊／臥褥の辞 高島屋塘雨
9水〔雑譚〕澤上宗の説教 澤上漁史
10木〔寄書〕〈人間万事苦勞は〉 高しまや塘雨／猿の願望 中坂のまとき
12土〔寄書〕〈夫れ国を富すは〉 王子飛鳥山下 瀬和尾役蔵
13日〔寄書〕〈人の勤めに迂閑と乗て〉 竹窓閑人／猿の願望(前号の続き) 中阪まとき
15火〔寄書〕三鳥の伝(喚子鳥) 東喜坊／〈興に乗じて酒は飲むとも〉 落田沈
16水〔寄書〕〈世上の人の憂とする第一は〉 高島屋塘雨
17木〔寄書〕〈亀戸の天満宮は〉 坂本町の隠者風柳閑人
18金〔雑譚〕紅葉館の記(贈子安君) 澤上漁史 〔寄書〕いりほがの説 苔の屋一心
19土〔寄書〕〈此程根岸の知己の許を〉 沼津 鼓腹屋猷兵衛／〈今はむかし〉 まとき漫筆
20日〔雑譚〕紅葉館に遊ぶの記 転々堂主人 〔寄書〕〈世の中には困る事が〉 華睡庵
22火〔雑譚〕紅葉館の記 放誕子 〔寄書〕〈オイ井内君僕は今〉 白痴の屋一心
23水〔寄書〕〈本月中の八日〉 絵馬屋／〈隠居さん其内は暫く〉 根岸 幸堂／〈小弟此頃友
人の所にて〉 弓町 世話尾彌吉
24木〔雑譚〕奇孝子の話 華睡庵塘雨 〔寄書〕器物論 人見悟空
25金〔寄書〕桜炭に告るの文 晴雪生／〈或る若人が伯父の許へ〉 亀島町 木村富三／〈ある
農夫が田を耕してゐると〉 八日市場小松生
26土〔寄書〕〈人命の貴重なる所より〉 外神田 かな井安善
27日〔雑譚〕多言を忌む 永井碌 〔寄書〕〈諸近頃は火事沙汰が多く〉 麻布 水口徹心／商
賈の名聞 華睡庵

明治14年（1881）3月

- 2水〔寄書〕＜紙幣を持たぬ生意気が＞ 南新二 *附録として、3月1日開会の「第二回内国勸業博覧会場全図並心得」掲載
- 3木〔寄書〕太鼓の徳 華睡庵戯稿／＜貴社新聞千八百二拾三号の＞ 有隣堂内 石塚誠太郎
- 4金〔雑譚〕風流とは如何なるものぞ 澤上漁史 〔寄書〕＜一夜風の神の＞ 浅草蔵前 玄同
- 5土〔寄書〕＜此前の博覧会には＞ 浦山珍陳／国香の羹の記 中坂まとき
- 6日〔雑譚〕人は木像を作るが如くせよ 筑水漁夫 〔寄書〕響の恐るべきは何ぞ 二勿菴 大江あやみ
- 8火〔寄書〕新製昔談話 幸堂稿
- 9水〔寄書〕＜怪物あり夜間三眼の＞ 下総八日市場 かとり戯述／＜お気の毒とは人の心を＞ 高島屋塘雨／一夕茶話 苔の屋一心漫記
- 10木〔雑譚〕酒は損益孰れか多き 澤上漁史 〔寄書〕毎日先生の話 中坂まとき
- 11金〔寄書〕＜此頃久々にて＞ 王子村 愛月楼主人／＜新井白石翁の墳墓は＞ 南塘釣子
- 12土〔雑譚〕才子美人の嘆 放誕子 〔寄書〕人は能弁ならざる可らず 屈窮生
- 13日〔寄書〕＜春とはいへど＞ 八日市場 小松／ソレ油断すべからず 番町 菊園主人
- 15火〔寄書〕猫火鉢の賛 野崎左文／＜多言は日者貴社新聞で＞ 晴雪生
- 16水〔寄書〕紅雪の奇報 中坂まとき／＜雑沓を厭ひ降を幸ひ博覧会へ＞ 浅草蔵前 玄同
- 17木〔雑譚〕晩学を晩と謂ふ可らず 澤上漁史 〔寄書〕名の株主 南新二
- 18金〔寄書〕起南誌 晴雪居士／＜小生の知己なる田舎者某＞ 下総八日市場 小松生
- 19土〔雑譚〕紳士の弁 澤上漁史 〔寄書〕＜臆病者の眼には＞ 高しまや／＜昔しある辻君が＞ 通二丁目 安田／迂闊の弁 麻布 徹心道人
- 22火〔寄書〕＜都会市中火災予防の事にては＞ 外神田 かな井安善
- 23水〔寄書〕博覧会の苦情 高島屋塘雨
- 24木〔雑譚〕＜客冬より寒気は殊の外凜烈して＞ 放誕子 〔寄書〕＜俚言に人の見を正うせん＞ 烏森 梧窓迂夫
- 25金〔寄書〕表裏の探訪 鹿山人／＜昔しある里に一人の画工あり＞ 根津 滝沢生
- 26土〔寄書〕＜桜の精雪女郎に向つて＞ 下総八日市場 小松稿／＜人は道德を以て身を脩め＞ 高島屋塘雨
- 27日〔寄書〕恋路の電信 草の屋学山
- 29火〔寄書〕髭髯も恃む可らず 虎之門 紫花生／起南誌二 晴雪居士
- 30水〔寄書〕迷犬を見て感あり 本石四 小僧義郎／梅花と梅干の論 千住 須川光風
- 31木〔雑譚〕食逃 饗庭篁村 〔寄書〕黒塚の余波 東喜坊／＜静岡県士族＞ 木挽町 猷老

明治14年（1881）4月

- 1金〔寄書〕＜茲に老夫婦あり＞ 岩手県下盛岡 石沢生／うづら衣のうち鼻箴（四方赤良遺稿） 琴通舎康楽
- 2土〔雑譚〕落花狼藉 澤上漁史 〔寄書〕陰花披露 大黒屋甲子／＜諺に、昔し正宗今の菜刀

宗 像 和 重

と> 浅草蔵前 小林玄同

- 5 火〔寄書〕<過し日墨陀辺の梅を *各一首> 蟹舎左文・松葉舎華南・会津舎杏村・琴通舎
／<西哲スミス氏曰く> 芝烏森町 梧窓
- 6 水〔雜譚〕万物の変化 加藤瓢乎稿 〔寄書〕鎮火の誤愉快 須賀町 喜智家宗園／<碁象棋
も嗜まざるよりは> 華睡庵塘雨
- 7 木〔寄書〕日本は貧国に非ず 晴雪生
- 8 金〔寄書〕<エ、是は此の度> 中坂の まとき漫筆／結髪の嘶し 下谷の 通新舎稿
- 9 土〔雜譚〕侏儒笑ふ可らず 湊上漁史 〔寄書〕<或県令の其管下巡廻の> 通式 安田
- 10 日〔寄書〕納豆や納豆や 尾張町新地 松養生軒卓枝／御重宝裏店茶の湯 南新二
- 12 火〔雜譚〕子供の成長は親の教育による 放誕子 〔寄書〕觀博覧会 十八公舎主人弘恭／
＜頭にチヨン髷を戴き＞ 烏森 梧窓
- 13 水〔寄書〕女は愛して恐るべきもの 高島屋塘雨／よめの出入 駒込 手五利
- 14 木〔雜譚〕摸倣の訣 湊上漁史 〔寄書〕命がものだね 鹿山人／陳腐談 富田夏曉
- 15 金〔寄書〕薪買ひを見て感あり 熊谷駅 清閑狂人／<ある夜の夢に> 浅草福井町 寺島霞
村／<余曾てスペンセル氏に聞く> 例の梧窓の漫筆
- 16 土〔寄書〕<洒落をいふに> 下総八日市場 小松／<戯言も其時にとツては> 竹窓閑人
- 17 日〔雜譚〕大小汝が選むに任す 今川肅
- 19 火〔雜譚〕旧大垣藩の親睦会 加藤瓢乎稿 〔寄書〕<オイ兵左衛門どん> 王子村 愛月楼
主人
- 20 水〔寄書〕桜の誉 鶯亭夢窓／<僕れ先つ頃真間の手古奈の> 深川みさか／<磯訓松の節く
れたるも> 二勿莽 大江あやみ
- 21 木〔寄書〕余慶なお世話 富田夏曉
- 22 金〔寄書〕<世の中に楽しきもの少なからず> 中坂まとき漫筆／本年墨堤に花無 南新二
- 23 土〔寄書〕墨堤の五笑 高島屋塘雨
- 24 日〔寄書〕深夜幽魂に逢ふ 苔の屋一心稿
- 26 火〔寄書〕<販夫あり蜆を売て> 深川みさか／墨堤の五笑前号の続き
- 28 木〔寄書〕泥水の足は洗ひ難し 鹿山人／<酒は礼に始まるとか> 真岡 木朴
- 29 金〔寄書〕貧孤ならず必ず隣りあり 晴雪居士／デモの話し 下谷の 通新舎
- 30 土〔寄書〕<頃日偶々無聊の> 本所錦糸堀 北海道人／<物に精神を籠ると> 高島屋

明治14年(1881) 5月

- 1 日〔寄書〕<怪力乱神を語らずとは> 池之端 竜門橋蔵
- 2 月〔雜譚〕思召の説 湊上漁史 〔寄書〕猫八を見て感あり 富田夏曉／<貴社千八百七十号
の> 木挽町 扶桑生
- 4 水〔寄書〕<貴社新聞北海道人の> 歌舞伎新報の 久保田彦作／周旋屋の不心切 晴雪居士
- 5 木〔寄書〕ヲヤの説 華睡庵塘雨
- 6 金〔寄書〕<貴社新聞千八百八十二号投書欄内に> 西江戸川町雪操軒 花魁／<凡そ世に役
員様と云は> 外神田 かなる安善
- 7 土〔寄書〕<今朝は例より早く起たれば> 中坂 まとき漫筆

- 8日〔雑譚〕山林学校設けざるべからず 放誕子 〔寄書〕〈物事はなんでもやさしいものから〉 東喜坊／扶桑先生の問に答ふ 水道橋内 河合通弘
- 10火〔寄書〕汽車乗客へ忠告 琴通舎康楽／虎の児 富田夏曉
- 11水〔寄書〕〈古への婦のつらさを〉 神田 超香斎／〈蓋し吾儕は金箔付の無学なり〉 高島屋塘雨
- 13金〔雑譚〕西京変換論 墨上漁史 〔寄書〕下手の考へ休むに似たり 晴雪居士
- 14土〔寄書〕山吹の花一枝 中坂 まとき漫筆／米の下落は憂ひの一つ 王子村愛月楼主人
- 15日〔雑譚〕南瓜の怪 墨上漁史 〔寄書〕人真似の禁酒 北 古三／〈迂生今回朋友数名と〉 八日市場 小松
- 18水〔寄書〕衛生の演説 浣華翁
- 19木〔寄書〕〈朝日さし夕日輝くのお説は〉 洞津 醉菊／〈旭さし夕日輝く云々の件を〉 神齡山下 山塾岸任／〈貴社新聞に一たび近江の朝日さし〉 四ッ谷 四溪山士
- 20金〔寄書〕〈頃日斬髪所に於て〉 在神田明神下 医生 長崎／雨の辞 杉々亭落葉
- 21土〔寄書〕〈サアサアきいちゃんも〉 錦糸濠 北海道人
- 22日〔雑譚〕儒生誤国 墨上漁史 〔寄書〕大丈夫と聞て安心すべからず 鹿山人
- 25水〔寄書〕上天は喰ふべからず 京橋 天々堂歎羅痴／於豊の偽もの 南新二
- 26木〔寄書〕茶番能狂言・千金丹 本郷区駒込東片町百廿番地 尾久羅無佐衣紋述
- 27金〔寄書〕〈余仏国パリスに在りし時〉 牛込 青木巖／親睦会に感あり 晴雪居士
- 28土〔雑譚〕文章小論 墨上漁史 〔寄書〕〈楚人に両妻あり〉 錦糸堀 北海道人／しくじつたり 富田夏曉
- 29日〔寄書〕胸算用 亀島町 河賀沢／〈世に阿房と号す人種有りて〉 高島屋塘雨
- 31火〔寄書〕吃驚仰天の傘 北 古三

明治14年（1881）6月

- 1水〔寄書〕鼻毛の嘶し 下谷の 通新舎／〈多摩郡二子の渡りへ〉 露園主人／長い浮世に長い命 伊藤橋塘
- 2木〔寄書〕おに火の怪 中坂まとき／見ぐるしきもの 浅草 浣華翁
- 3金〔寄書〕〈四五日前の新聞に〉 弓町 竹窓閑人／〈氷蚕寒を知らず〉 錦糸堀 北海道人
- 4土〔寄書〕〈難波江のあしの節間の〉 亀島町 阿賀沢／〈貴社新紙第千九百巻号〉 浅田屋星野要蔵
- 5日〔寄書〕〈人の性質は種々あれど〉 高島屋塘雨／事は平生に在り 晴雪居士
- 8水〔寄書〕〈道人近日將に本国北海道に〉 錦糸堀 北海道人述
- 9木〔雑譚〕虚飾も亦欠べからざるの要具 苔の屋一心稿 〔寄書〕贈星野要蔵殿 下谷 通新舎／〈遠からんものは音にも聞〉 八文盛の慳貪屋
- 10金〔寄書〕発句の疑問 高島屋塘雨
- 11土〔雑譚〕或者の問ふ 墨上漁史 〔寄書〕商人見世之備 紫波佐記
- 12日〔寄書〕府下の蕎麦商は皆看板を懸換るべし 本所の鋳物師 網吉／〈白川侯の物せられし〉 外神田 かな井安善
- 14火〔寄書〕奇猫な変革 鹿山人

- 15水〔寄書〕＜去十日貴社新聞寄書に＞ 築地の寓居なる紅葉園夢外
 16木〔寄書〕自嘆 晴雪居士
 17金〔雜譚〕考の力 今川肅 〔寄書〕＜読売新聞第千九百十九号寄書欄内に＞ 規矩堂老人
 18土〔寄書〕＜此の頃小児の咳が流行するよしなるが＞ 中坂まときしるす
 19日〔雜譚〕やかましの笛 溼上漁史 〔寄書〕＜夏はまた冬がましちやと＞ 黒陀 机友処士
 ／夢外先生に答ふ 高島屋塘雨
 21火〔寄書〕虎風々々小談 晴雪居士／無理進めの困難咄し 下総八日市場 小松
 22水〔寄書〕訴訟の繁劇 馬喰町 樛瓠少年／金溜めの妙法 横浜 美家田
 23木〔寄書〕＜劇場に臨む者多くは＞ 高島屋
 24金〔寄書〕塘雨先生に再申 紅葉園夢外／＜朋友の楽みには＞ 亀島町 木村富三
 25土〔寄書〕客氣論 浣華翁／人真似の説 王子村 愛月楼主人述／＜花に鳴く鶯＞ 唯山人
 26日〔寄書〕＜高島屋大人の発句の疑問に＞ 溜池 百童老衲／＜晩酌の胚盤を＞ 下総八日市場 小松
 28火〔雜譚〕奢る者は必ず窮す 溼上漁史 〔寄書〕空世事の騒動 板橋舞野村 吉川
 29水〔寄書〕示蜚辞 赤坂寓 半月庵芳律／望雲行の感 馬四 樛瓠少年

明治14年(1881) 7月

- 2土〔雜譚〕人に交るの心得 饗庭篁村 〔寄書〕＜互郷共に言難しと＞ 浅艸 浣華翁／昼蘭燈 中坂まとき
 3日〔寄書〕新聞紙を疎漏に読む人に告ぐ 晴雪居士
 5火〔寄書〕少年の注意 馬喰町 小川樛瓠／己に誇て方向を失つ勿れ 高島屋塘雨
 6水〔雜譚〕観古美術会閉場 高島藍泉手稿 〔寄書〕奇酒の得失 東喜坊
 7木〔寄書〕＜時に此の頃は＞ 中坂まとき漫筆／＜太郎兵衛さん潑逆ひで＞ 外神田 かな井安善
 8金〔雜譚〕野鄙の操觚者 溼上漁史 〔寄書〕底にお氣が附れやせん歟 伊藤橋塘／＜底干なき淵やは騒ぐ＞ 芝 太田龍子
 9土〔寄書〕餅のないお雑煮 南新二／廓の血の雨愁歎ばなし 下谷 通新舎
 10日〔寄書〕トンチンカン 晴雪居士／＜上野博覧会は既に閉場になり＞ 坂本町 風流閑人
 12火〔寄書〕喰散の弊 薬研堀 多満喜
 13水〔寄書〕＜我宿を人の訪ふこそ＞ 竹窓閑人／壇那の濫称 晴雪子稿
 14木〔雜譚〕月見のざれごと 溼上漁史 〔寄書〕お三どんへ忠告 芝伊皿子 碌々子／新聞紙上に番人を置くゝ 鹿山人
 15金〔寄書〕＜時に先生取付もない事を＞ 矢来 半林子
 16土〔雜譚〕夏の端居 華すみ庵塘雨 〔寄書〕お精霊さまお迎ひ 伊藤橋塘
 17日〔寄書〕＜咲ざらば、桜を人の＞ 浅草 浣華翁
 19火〔寄書〕紅裙貴媛に苦き御土産を呈す 烏森 梧窓
 20水〔雜譚〕世の中は走馬燈 放誕子 〔寄書〕新富座評菓子の一 南新二／変な説 晴雪居士
 21木〔新聞〕北海道の概況 煤田居士報

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

- 22金〔寄書〕〈御一新まへの事を語るは〉 華睡庵塘雨
 23土〔雑譚〕銀街の妖怪 遷上漁史 〔新聞〕北海道概況—昨日の続き 煤田居士報
 24日〔寄書〕丹頂の戒しめ 菊の家愛蝶／〈去家に愛度ことが有ッて〉 南新二
 26火〔寄書〕〈吉や手前は〉 京橋銀一 吉川浦成投／上戸先生に一撃 曾我自然
 27水〔寄書〕偽心切 晴雪居士／〈世を遁れて菩提を〉 苔の屋一心
 28木〔寄書〕大都に鬼有り 高島屋塘雨
 29金〔寄書〕〈武門の世には〉 浅草 浣華翁／〈暑き日や鼻突あはす〉 玩仏居士仮名垣魯文
 31日〔寄書〕海綿社会 南新二

明治14年（1881）8月

- 2火〔寄書〕囲碁の感 晴雪居士／贈答の即興 琴通舎稿
 3水〔雑譚〕我が悔は人の戒め 遷上漁史 〔寄書〕〈オゝ暑い暑い事〉 中坂まとき漫筆／牽
 牛花を見て感有り 華睡庵
 4木〔寄書〕河津の訴 河津金線
 5金〔寄書〕〈北豊島郡金杉村四百廿〇番地の〉 入谷村 清水／玄水は捨つべからず 馬喰町
 小川樛瓠
 6土〔寄書〕真偽の争ひ 鹿山人／〈予は近世の少年が〉 例の晴雪子
 7日〔寄書〕〈古歌に〉本芝 芝山樵史／河津金線大人に呈す 浅艸 浣華翁
 9火〔寄書〕犢鼻褌の議論 高島屋塘雨
 10水〔雑譚〕人中の狐狸 遷上漁史 〔寄書〕些細の小言 晴雪居士／伊勢山の裸体伎踊 横浜
 松月堂
 11木〔寄書〕手も口程に物を言ふ 下総八日市場 小松／〈イヤ是はお隣りの〉 桜蔭野史
 12金〔寄書〕かへるの異称 京橋 耳学小僧／〈近来新聞紙の〉 馬喰町 小川樛瓠
 13土〔寄書〕〈去る六日の紙上へ〉 華睡庵塘雨
 14日〔寄書〕〈寒暖計は九十度前後に〉 松葉軒 卓枝
 16火〔雑譚〕今昔の変化 遷上漁史
 17水〔寄書〕〈此程の炎熱の〉 下総八日市場 小松／掛引は信用を失するの基ひ 可愛楼晴雪
 18木〔寄書〕文字の功能無筆文盲の危嶮 礪川村耕月濯雲園主
 19金〔寄書〕投書の無尽蔵 可愛楼 晴雪居士
 20土〔寄書〕文字の功能無筆文盲の危嶮前号の続き 礪川村耕月濯雲園主
 21日〔寄書〕〈東海に魚あり〉 高島屋 塘雨／〈首へ金輪をはめた〉 浮世小路 二葉摘能
 23火〔雑譚〕戸外の学校 今川肅 〔寄書〕〈つれつれ草に家の〉 中坂 まとき
 24水〔寄書〕〈ヤレヤレ暑い事だ〉 青物町 会田皆真
 25木〔寄書〕梅屋鶴寿翁追福会の景況 琴通舎述／〈翁ひとゝせ、仙台に〉 浣華翁戯述
 26金〔寄書〕汗臭連予防の忠告 下総八日市場 小松
 27土〔寄書〕新鑿の池 可愛楼晴雪
 28日〔寄書〕午睡の寐言 馬喰町 小川樛瓠
 30火〔雑譚〕理を枉て非に従ふ勿れ 遷上漁史 〔寄書〕〈ある人この頃の暑さから〉 中坂ま
 とき漫筆

宗 像 和 重

31水〔寄書〕幽霊の本性 高島屋塘雨／＜去る十二日主上が＞ 芝 紅楓漁者

明治14年（1881）9月

- 1木〔寄書〕＜屑イ屑はござい＞ 東喜坊
2金〔雜譚〕なまけもの 苔の屋一心稿 〔寄書〕＜男女を問はず＞ 瀬和尾屋喜翁／転ばぬ先の杖 横浜 鷹の尾居士
3土〔寄書〕＜今より四百年のむかし＞ 浅艸 浣華翁
4日〔寄書〕＜此頃発兌せし戯曲＞ 外神田 かな井安善／不思議の暗合 東京 無聞菴主人
6火〔寄書〕暑い暑い 可愛楼晴雪／人の心は月を観るが如し 礪川 耕月灌雲園主
7水〔雜譚〕盆蘭の花 遷上漁史 〔寄書〕＜古き諺に＞ 亀島町 木村富三／玉蜀黍の栽培法 在麻布 三谷晴良
8木〔寄書〕新聞探訪の疎漏 馬喰町 小川樛瓠／吉後は凶い 東喜坊
9金〔寄書〕書生諸君に忠告す 畊雨生／八公の詞感有り 高島屋塘雨
10土〔寄書〕難きに似て難きに非ず 可愛楼晴雪居士／普通の文字は不可不学 八日市場 小松
11日〔寄書〕渾て堪忍 華睡庵塘雨
13火〔寄書〕団扇の棚に帰るを送る 可愛楼晴雪／＜此夜炎熱不可当＞ 青洲漁夫
14水〔寄書〕＜百円と貳百円の貸借を＞ 下谷の通新舎／＜何事も実地を踏ねば＞ 竹窓閑人
15木〔寄書〕当惑の説 芝浦の隊長稿
16金〔寄書〕あまやかされぬぞ 中坂まとき／吾人は無欲にして奢侈なり 畊雨生
17土〔雜譚〕物聞山 遷上漁史 〔寄書〕河津金線君に質す 千住 森林太郎
18日〔寄書〕＜貴社千九百九十六号＞ 溜池 小林／陋習も亦た利なきに非ず 西京 青洲漁夫
20火〔雜譚〕第二千号之祝詞 高島藍泉 〔寄書〕＜此ふみのなり出しより＞＊二千号を寿ぐ歌 露園主人／読売新聞第二千号の発行を祝す 隻木生記／＜＊二千号を寿ぐ歌＞ 琴通舎 康楽／＜＊二千号祝詞＞ 青物町 会田皆真 ＊この日「読売新聞」二千号発行
21水〔寄書〕＜貴社本月十五日の紙上に＞ 越前堀の 一寒生／夏秋の述懐 八日市場 小松稿
22木〔寄書〕＜＊二千号祝詞＞ 前島和徳／二千号の祝詞 浣華翁
24土〔寄書〕後の祭 東喜坊／閉口余言一 可愛楼晴雪
25日〔寄書〕＜或人曰く人は伶俐と＞ 華睡庵塘雨／閉口余言の自序 可愛楼晴雪
27火〔寄書〕＜往昔唐土に＞ 芝寸林子
28水〔寄書〕兎角にほめたくないは何物ぞ 中坂まとき
29木〔寄書〕悪むべき売薬師あり 小川樛瓠
30金〔寄書〕＜嗚呼有難イ＞ 青物町 会田皆真／＜貨幣を如何なるものと＞ 浣華翁

明治14年（1881）10月

- 1土〔寄書〕投書家のためにいふ 千住 無丁老農
2日〔寄書〕＜此頃出版に成りたる＞ 高しまや／自由国の犬は専制国の人に勝る 横浜 松月堂
4火〔寄書〕ア、遅カリシ遅カリシ 華睡庵塘雨／閉口余言二 可愛楼晴雪
5水〔雜譚〕心中と金中の区別 饗庭篁村 〔寄書〕童子の間に答ふ 耕雨老夫

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

- 6 木〔寄書〕＜小生一日ある華族様の＞ 中坂の ま印／賭俳論 猿蓑翁
 7 金〔寄書〕晴雪子へ謝辞 いろは新聞印刷小僧 東洋太郎
 9 日〔寄書〕世界転覆の妄談に迷ふ勿れ 苔の屋一心／松茸の偽物 南新二
 12 水〔寄書〕＜瓢箪から駒が出たのも＞ 高島屋塘雨
 13 木〔雑譚〕山奥の花 墨上漁史 〔寄書〕世界転覆の妄説に利あり 東喜坊
 14 金〔寄書〕閉口余言三 可愛楼晴雪／宝見する女 浣華翁戯述
 15 土〔寄書〕光陰の貴きを忘れたる者は誰そや 千住無丁翁
 16 日〔寄書〕小天地の転覆は今夜にも知れず 南新二／詞にお里を頭はす勿れ 竹窓閑人
 18 火〔寄書〕相手は求むべきもの 亀島町 木村富三／煙火の感 八日市場 小松
 19 水〔寄書〕十月十三日の新聞を読む 可愛楼晴雪／喋舌る可らず 浣華翁
 20 木〔雑譚〕かこち言 墨上漁史 〔寄書〕画賛の感 華睡庵塘雨／＜或る吝嗇家の許へ＞ 横
 浜戸部 管生
 21 金〔寄書〕＜雲開いて山の高きを見＞ 中坂 まとき
 22 土〔寄書〕秋夜月に歩す 苔の屋一心稿
 23 日〔寄書〕言語は程よきを善しとす 千住 無丁／苦は楽の種 耕月瀧雲園主
 25 火〔寄書〕＜時に富三さん此程南新二先生が＞ 亀島町 木村富三／閉口余言四 可愛楼晴雪
 26 水〔寄書〕＜世に名立る菓子見世＞ 外神田 かな井安善
 27 木〔寄書〕＜昔し水戸の烈公＞ 築地寓 遅睡庵主人
 28 金〔寄書〕千住無丁翁先生に答ふ 浣華翁
 29 土〔雑譚〕沢菴漬の説 墨上漁史 〔寄書〕＜友人某より狐拳原志といへる＞ 来々堂
 30 日〔寄書〕＜家僕炊婢に言て曰く＞ 竹窓閑人

明治14年（1881）11月

- 1 火〔寄書〕狐拳原志の続き 来々堂鈔録
 2 水〔寄書〕自棄説一 可愛楼主人／＜牛込の牛の角文字＞ 牛込 金秋老人
 4 金〔雑譚〕子安先生の間に奉答す 墨上漁史 〔寄書〕＜昔しギリシャ国に＞ 三省舎青洲／
 ＜おのれ芝の神明に詣でつゝ＞ 築地寓 遅睡庵
 5 土〔寄書〕出放題 中坂まとき／＜綿入一枚に袷羽織＞ 華睡庵 塘雨
 6 日〔雑譚〕論語読みのはたらき 放誕子 〔寄書〕＜最早御命講や御十夜が＞ 京橋市隠 野
 曾木禁物／＜昔し人の人の短慮不成功と＞ 大伝馬二 程の家義明稿
 8 火〔寄書〕卑屈者の流行 紫芳迂生
 9 水〔雑譚〕秋のつれつれ 華睡庵塘雨 〔寄書〕狐拳原志の続き 来々堂鈔録／＜行末を思ふ
 も悲し＞ 神田生
 10 木〔寄書〕勉強は誰が為ぞ 下谷の 通新舎／＜イヤ交つたり＞ 牛込 賞楠堂
 11 金〔寄書〕心酔の弊 横浜戸部 管生／＜毎度諸君に云はれても＞ 木挽町 葛飾梅兄
 12 土〔寄書〕直なるものに枉れる影無し 高島屋塘雨／お台場蠣の会議 木下紅山
 13 日〔雑譚〕人の好む所に於て僻す 墨上漁史 〔寄書〕是を直すの難易 可愛楼晴雪／＜去る
 九日の寄書欄内に＞ 牛込 歙の家主人
 15 火〔寄書〕深切の定限 上槻町 青木蘆川／＜貴社新聞大貳千四拾貳号に＞ 浣華翁

宗 像 和 重

- 16水〔雑譚〕競技会の賛成 高島藍泉 〔寄書〕自棄説二 可愛楼晴雪／＜曩の日賞楠堂先生が＞ 弓町の住人 雲谷斎
- 17木〔寄書〕朝湯には桶まで箍が緩んで居 墨水 北古三／＜深草の元政坊の＞ 木挽町 葛飾梅兄
- 18金〔寄書〕浣華翁に呈す 無丁子／薬罐勉強 横湾 菅生
- 19土〔寄書〕旅窓漫録一 築地寓 水戸孤客 遅睡庵／＜放蕩子あり＞ 中坂 まとき
- 20日〔寄書〕壁に耳有り 素心逸人／小春の記 向島 机友居士
- 22火〔雑譚〕隅田の冬げしき 澤上漁史 〔寄書〕浣華翁大人に答ふ 横浜 菅陽湾
- 24木〔寄書〕小僧の愚痴 大伝馬二 小僧義朗／＜エヘン御免下さい＞ 下谷の通新舎
- 25金〔寄書〕藪に香の物 墨堤隠南窓新二／＜行くに小径に由らずとの＞ 牛込 歙の家主人
- 27日〔雑譚〕大晦日近し 澤上漁史 〔寄書〕曲直の間 無丁子／兵勢を更張するは今日の急務なり 石川野人
- 29火〔寄書〕岡本大人を弔す 無丁子 *岡本大人は25日に死去した投書家浣華翁こと岡本長之／物価高直に恐れぬ儉約気質 不知文字舎可笑
- 30水〔寄書〕菊見の感 中坂 まとき／＜柳北翁の許に＞ 向島 机友居士

明治14年（1881）12月

- 1木〔寄書〕感ありといふ投書を見て感なし 木倉多古／衣裳論上 可愛楼晴雪
- 2金〔寄書〕＜我友の師とあふぎし＞ 琴通舎康楽／旅窓漫録二 築地寓 水戸孤客 遅睡庵
- 3土〔寄書〕＜毎度貴社新聞に＞ 牛込 賞楠堂／＜兎角人は博識振て＞ 葛飾梅兄
- 4日〔寄書〕外見ばかり 南新二／読売新聞の投書家浣華翁の死を悼みて＜*二首＞ 可愛楼晴雪／＜イヤ是は僕が失策だ＞ 金秋散人
- 6火〔雑譚〕五重の塔 饗庭篁村 〔寄書〕馬の説 築地寓 遅睡庵／車子に酒を飲すべからず 高島屋塘雨
- 7水〔寄書〕＜天は万物を＞ 中坂 まとき／＜時に栄助さん＞ 外神田 かな井安善
- 8木〔寄書〕矢口の嘆 向島 机友居士／衣裳論中 可愛楼晴雪
- 9金〔寄書〕人を誹れば我も誹らる 東喜坊
- 10土〔雑譚〕時雨の浮雲 転々堂主人 〔寄書〕＜御世の光もて輝添て＞ 牛込 金秋老人述／衣裳論下 可愛楼晴雪／浣華翁の身まがりしを悼みて＜*一首＞ 八日市場小松
- 11日〔寄書〕旅窓漫録四 築地寓 水戸孤客遅睡庵／河竹其水氏の退隠を惜まぬ 北古三
- 13火〔寄書〕＜蟋蟀なくや霜夜の＞ 華睡庵老夫／＜イヤ熊さんか＞ まとき戯筆
- 14水〔雑譚〕滝の川に遊ぶの記 放誕子 〔寄書〕おさんに告 向島 机友居士／＜人を見たら盗人と思へ＞ 浅草今戸 厄介舎偽法師
- 15木〔寄書〕人力車の流弊 横浜 菅陽湾／＜極昔の事とかある樵夫が＞ 木挽町 葛飾梅兄
- 16金〔雑譚〕心を転ずるは気の迷ひに非ず 高島藍泉 〔寄書〕＜此かぞへ歌及び今やう歌は＞ 牛込 慇懃主人／勤工場の流行にお気が附れませんか 苔の屋
- 17土〔雑譚〕世に方便無かる可からず 澤上漁史 〔寄書〕旅窓漫録三 築地寓 水戸孤客遅睡庵／中道にして廃せば其影響如何 可愛楼晴雪
- 18日〔寄書〕奢侈は身を亡すの原 高島屋塘雨／無丁子曲直の間に答ふ 松楓庵

- 20火〔寄書〕〈あるは庵の戸に蟋蟀の〉 向島 机友処士
21水〔寄書〕空店の大黒 横浜 菅陽湾
22木〔寄書〕旅窓漫録五 遅睡庵／〈某先生とやらの興歌に〉 堂加鎭九郎・高島屋塘雨
23金〔寄書〕初雪のえせ歌 琴通舎／〈追々寒くなるにつけ〉 本所南二葉の一変人
24土〔寄書〕雪の論 向島 机友処士／〈ヲヤヲヤ久兵衛さんか〉 亀島町 木村富三
25日〔雑譚〕一厘の潤筆 澤上漁史 〔寄書〕〈海軍少佐国友次郎君の〉 近藤真琴／心の鬼が
身を責る 苔の屋一心
27火〔寄書〕菅陽湾大人に謝す 向島 机友居士／歳末の辞 可愛楼晴雪
28水〔寄書〕余が信友東照宮の真跡を珍藏す其文に就て感ずる処あり摸写して貴社に投ず 桜田
本郷坊 星野康斎
29木〔雑譚〕多少の弁 澤上漁史 〔寄書〕〈夜来高樹の上にすさまじき音が〉 中坂まとき／
遅睡庵子に告ぐ 書生総代 神田鈴万

明治15年（1882）1月

- 4水〔寄書〕〈余に目出度い事と〉 下総八日市場 かとり迂隻／〈狐にしもはめん心はあら玉
の〉 下総八日市場 大川小松
〔配り初めの附録〕新年の演詞 加藤瓢乎謹述／壬午歳旦＜＊一首＞ 成島柳北／としのは
じめに＜＊各一首＞ 小中村清矩・鶴久子／新年の歌よめる中に＜＊一首＞ 江里川千
照／新年雪＜＊一首＞ 寛正庸／元朝試筆＜＊一首＞ 岡野伊平／新年鶯＜＊一首＞
松の門みさ子／壬午新年＜＊漢詩＞ 湖上加藤秋爽・亀谷省軒／〈初鳥のカアに〉 高
島屋塘雨／初摺の祝詞 千住 無丁子／読売新聞の初摺・風 遣羽子・年礼・河水久澄
＜＊各一首＞ 武日野駅 絵馬屋／〈後ろに近き大晦日も〉 牛込 鯉の家主人／〈イ
ヤ是は皆さん〉 中坂にすまとき野史／初摺の祝詞 東喜坊／＜＊一首＞ 立斎広重
／〈ヤレヤレ家業柄とは〉牛込 賞楠堂／初摺の祝詞 可愛楼晴雪／松有歓声＜＊各一
首＞ 齡堂松寿・岩上亭安久楽・千種菴秋吉・竹芝浦人・玉園巖美・千秋堂愛竹・桃美
園三千世・千松亭琴高・人見春翁・画賛人額翁・荒井賛醇・亀の舎池住・秋琴亭緒依・
会津舎杏村・琴の舎調・井池みち子・佐野るゐ子・琴通舎康楽／〈ヘイお目出たうと〉
幸堂得知／＜＊各一句＞ 梅亭・若丸・井蛙・湖北・静亀・夢外・一心・寄生・杏雨・
芸洲・梧園・梅老・雀志・鹿山人／人体のうち親睦会 南新二／新年の祝詞 木挽町
葛飾梅兄／〈馬ならばいか程はねんと〉 高島藍泉
6金〔寄書〕祝詞 向島 机友処士／長命鳥の言立 鹿山人
7土〔寄書〕初夢の寐言 戯久粹史
8日〔寄書〕午どしの酔言 馬喰町の小川樛瓠／新年 高崎文心堂／〈日月の移り行は〉 四谷
門脇五連
10火〔寄書〕頂門兀ても理屈は止まぬ 高島屋塘雨
11水〔寄書〕耳たぶの説 可愛楼晴雪
12木〔雑譚〕知らざるを知らずとせよ 澤上漁史 〔寄書〕陋庭の梅に題す 下谷の通新舎／
〈ある富家の隠居さんに〉 中坂 まとき
13金〔寄書〕〈疑ひといふものは〉 東喜坊／炭俵の記 下総八日市場 かとり迂夫

宗 像 和 重

- 14土〔寄書〕美形自慢の別嬪さんに告る 下総 小松迂生／＜思ひを少うして＞ 高しまや
 15日〔寄書〕＜年は声なくして行き＞ 太阿生／＜例年の新玉の＞ 亀島町 木村富三
 17火〔寄書〕言葉は慎しみたき事 木挽町 葛飾梅兄／＜謙遜して自から＞ 中坂まとき
 18水〔寄書〕少年諸君に謀る 可愛楼主人
 19木〔寄書〕自惚 向島 机友処士／＜父二世五連釋斎は＞ 三世 五連門脇椿老
 20金〔寄書〕努て人の上に立んと欲せよ 華睡庵
 21土〔寄書〕歳玉の順達 南新二／年頭の延引 前島和橋
 22日〔雜譚〕名利の焼失は何の前兆ぞ 愛雀軒主人 〔寄書〕河水久澄 宮内省文学御用掛安部
 真貞／親睦会余言 中坂まとき
 24火〔寄書〕貴社新聞の余光 安井霞橋／年礼のまご月 八日市場 小松
 25水〔雜譚〕熱海の鯛網 湊上漁史 〔寄書〕人間の末痴 南新二／＜維摩は丈室に＞ 横浜
 蒼鷹子
 26木〔寄書〕小民のこゝろ意気 戯久粹史／＜何んと世の中は＞ 芝 視日嗅鼻しるす
 27金〔寄書〕料理屋の開業 苔の屋 一心／大坂新報の身代り 可愛楼晴雪
 28土〔寄書〕業平文治 千住 不識个庵主／＜ヘイ廻文と差配人よりの＞ 青物町 会田皆真
 29日〔寄書〕貧富無常 可愛楼晴雪／＜死後の事まで思ひすごして＞ 高島屋塘雨
 31火〔寄書〕猥褻なる淫本を見る かめ島 木村野史／大事より小事を恐るゝ 幸堂得知／人物
 に因て言葉を遣ふべし 木挽町 葛飾梅兄

明治15年(1882) 2月

- 1水〔寄書〕夢中小言 華睡庵塘雨／＜一家齷齪多用の際＞ 向島 机友処士
 2木〔寄書〕＜方今朋友の病に罹り＞ 四谷 門脇五連／床上の祝詞 郷台 詩畑耕人
 3金〔雜譚〕隅田の梅 湊上漁史 〔寄書〕去年まで買被り 可愛楼主人稿
 4土〔寄書〕芝居見物論 向島 机友処士／＜昔し芭蕉翁の門下に＞ 亀島町 きむら富三
 5日〔雜譚〕著述の杜撰を歎く 愛雀軒主人 〔寄書〕＜近来我が國に夜会と申すこと＞ 蟠象
 外史／断食の得失 千住 不識个庵主
 7火〔寄書〕変化の正体 中坂まとき／＜昔しから流行唄は＞ 木挽町 葛飾梅兄
 8水〔寄書〕＜愚痴といふものは＞ 東喜坊
 9木〔寄書〕雪を愛す 華する庵
 10金〔雜譚〕いとせめて 湊上漁史 〔寄書〕抹茶の流行 馬喰町 小川樛瓠／＜万によるこば
 しきふしのある＞ 無才庵独慎
 12日〔寄書〕悪友に交る勿れ 鹿山人／雪は憎むべし愛すべからず 南新二
 14火〔寄書〕化仙の術 水戸孤客 遅睡菴／床上祝詞の続き 郷台 詩畑耕人
 15水〔寄書〕悪友に交る事勿れ(前号の続き) 東喜坊
 16木〔寄書〕＜私が悪けりやあやまりませう＞ 高島屋塘雨／猫と犬との関係 横浜 宮川翁
 17金〔雜譚〕小向井の梅花 湊上漁史 〔寄書〕紙鷲の説 横浜戸部 陽湾子／後悔は先に立ず
 富田夏曉
 18土〔寄書〕負嫌ひ 亀島町 木村富三／＜ベルセス曰く＞ 中坂まとき
 19日〔雜譚〕出獄の記 加藤瓢乎 〔寄書〕＜貴社前編輯長加藤瓢乎君は＞ 屋洲楽／カスの説

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

木挽町 葛飾梅兄／鼻の説 可愛楼晴雪

21火〔寄書〕＜世に金を多く設け貯ふる人あり＞ 外神田 かな井安善／＜牛の歩行の遅きを＞
五湖散人

22水〔寄書〕精神一到の弁 中坂まとき／＜或人の話しに金銭は＞ 高島屋塘雨

23木〔寄書〕＜火難除を火難除と＞ 向島 机友処士／唯々諾々 可愛楼晴雪

24金〔寄書〕狂と呼るゝもの却て狂にあらず 水戸孤客 遅睡菴

25土〔寄書〕離婚の夥しきを嘆ず 馬喰町 小川繆瓢／＜余が性古物を愛し＞ 向島 柳畑小史

26日〔雑譚〕独立し給へ 澤上漁史 〔寄書〕信切の弊は不信切より甚だし 横浜 宮川翁

28火〔寄書〕変体好先生 竹窓閑人／被害者の幸福は却って不幸か 可愛楼晴雪

明治15年（1882）3月

1水〔雑譚〕家事も亦豪駝家に倣へ 愛雀軒主人 〔寄書〕被害者の幸福は却って不幸か（続稿）
可愛楼晴雪／＜余歐洲に在りて地質学を＞ 牛込 青木巖

2木〔寄書〕被害者の幸福は却って不幸か（続稿） 可愛楼晴雪／何をか真の友といふ 向島
机友処士

3金〔雑譚〕人は二心なきを尊ぶ 放誕子 〔寄書〕木の子山の失策 八日市場 小松／新聞記
者を告訴する人に諭す 吉野町髪洗橋 北村姓

5日〔寄書〕＜イヨこれは御本堂の犬士様＞ 外神田 かな井安善

7火〔寄書〕額堂小言第一 高島屋塘雨／＜貴社新聞雑報中に＞ 水道橋内 河合通広

9木〔寄書〕看梅の感 八日市場 小松／記憶の説 亀島町 木村閑人

10金〔寄書〕＜予一日郊外に散歩して＞ 美濃国郡上八幡 北山の白翁

11土〔寄書〕＜風流気といふものは＞ 中坂まとき／＜東風脈々桜花開いて＞ 向島 机友処士

12日〔寄書〕儉約は百行の基 愛知県 安井霞橋／醜美は顔にあらず 吉野町髪洗橋 北兄／人
は友と処を擇むべし 横浜 蒼鷹子

15水〔寄書〕額堂小言第二 高島屋塘雨

16木〔寄書〕蜀山翁強記の説は疑ふべし 江戸川上 古樵人／母難日 可愛楼晴雪

17金〔雑譚〕誰か瞞着せらる可き 澤上漁史 〔寄書〕＜此頃の流行ものは＞ 鹿山人／傘の述
懐 三品蘭溪

18土〔寄書〕＜人と契らば薄く契て＞ 華すみ庵／古樵人の寄書を読む 一心迂夫

19日〔寄書〕鉛筆の用法 一橋外 成見徳助／母難日（前号の続き） 可愛楼晴雪

22水〔雑譚〕日就社新年宴会の祝詞 澤上漁史 〔寄書〕＜加藤小野両先生が＞ 四谷 続々亭
五連／擬文人怪の書を認話し 前島和橋

23木〔寄書〕人の厚意 富田夏暁

24金〔寄書〕齒痛忘れ薬簡易の妙法 猿楽町 江藤枳園／外部の開化も捨てからず 八日市場
小松

25土〔雑譚〕師心談 放誕子 〔寄書〕檜山の狂言 苔の屋一心稿

26日〔寄書〕＜エゝあまり巧らみませんで＞ 中坂 まとき漫筆

28火〔寄書〕可笑記を読む 郷台 香風閣主人／＜余曾て若かりし時＞ 吉野町髪洗橋 北村姓

29水〔寄書〕初めを誤る勿れ 可愛楼晴雪／＜規則を設くるは＞ 高しま屋

宗 像 和 重

30木〔雑譚〕保存の流行 瀬上漁史 〔寄書〕可笑記を読む（前号の続き） 香風閣主人／イス
パニヤ無尽加入者の予算 一心迂夫

31金〔寄書〕なくも一つの有用物乎 深川 可津葉／＜夜や寒き衣や薄き＞ 京橋寓 倉田藍江

明治15年（1882）4月

- 1土〔寄書〕二つに一つの物 中坂まとき
- 2日〔雑譚〕師心談（喪心）前号の続き 放誕子 〔寄書〕＜萩薄なべてふしみの＞ 小石川
柴橋庵菊圃／恒に往昔を顧よ 華睡庵塘雨
- 4火〔雑譚〕公私の弁 瀬上漁史 〔寄書〕愛知自由灯が板垣君を招待せし懇信会の景況 在名
古屋 岡本忠三郵送／下駄の履癖 東喜坊
- 5水〔寄書〕強窃問の公然盗を諫む 深川 かつば／老ても子に随はぬ姑の癖 苔の屋一心稿
- 6木〔寄書〕友人の両妻 香風閣主人／花見土産 高島屋塘雨
- 7金〔雑譚〕師心談（小心）前号の続き 放誕子 〔寄書〕らしうせよく＊蜀山人「いつもじ」
の紹介＞ 紫芳迂生
- 8土〔寄書〕＜上野の動物館には＞ 中坂まとき漫筆／対桜軒の小豆石夜の間に逃げうせし詞
牛島の のろ松記
- 9日〔寄書〕小園花観の記 可愛楼晴雪／蜀山人遺稿五文字前号の続き
- 11火〔寄書〕友人の両妻（前号の続き） 香風閣主人
- 12水〔寄書〕墨田の花 向島 机友処士／長を推し短に違へ 可愛楼晴雪
- 13木〔寄書〕蜀山人遺稿五文字前号の続き／＜公立小学校に限り＞ 前島和橋
- 14金〔寄書〕長を推し短に違へ（続稿） 晴雪迂夫／＜友人某来訪して曰く＞ 高島屋塘雨
- 15土〔寄書〕＜己が親族の家あるじにて＞ 外神田 かな井安善
- 16日〔雑譚〕風俗掛り 瀬上漁史 〔寄書〕墨堤花見記 東喜坊／張札の小言 香風閣主人
- 18火〔寄書〕＜春の魁と待にまたれし＞ 下総八日市場 小松／＜ある庖刀人が＞ 中坂まとき
- 19水〔寄書〕＜知つたふり耳学文で＞ 前島和橋／東台の花 本郷 許野奴太郎
- 20木〔寄書〕楽みは苦中にあり 前島和橋／東喜坊先生の小便所の小言に答ふ 各村総代の林兵
衛
- 21金〔寄書〕＜文字の中にも＞ 弓町 高島屋／＜墨水の陶工三浦乾也氏の＞ 南新二
- 22土〔寄書〕＜貴社新聞本月七日＞ 八丁堀 高橋雲亭生／泥棒社会 可愛楼晴雪
- 23日〔雑譚〕商賈の有志者に告ぐ 瀬上漁史 〔寄書〕泥棒社会（続稿） 可愛楼晴雪／洋杖を
買んとす 中坂まとき
- 25火〔寄書〕ペンキを嫌ふ林兵衛先生へ異見 東喜坊／泥棒社会（続稿） 可愛楼晴雪
- 26水〔寄書〕＜風雨会釈なく＞ 可喜散史／＜此程高島屋先生が＞ 外神田 かな井安善
- 27木〔寄書〕＜余二三日前＞ 竹窓閑人／＜今は陰曆弥生半ば＞ 四谷 門脇五連
- 29土〔寄書〕繁閑の説話 雲鶴道人／＜孔孟も人なり＞ 下谷 玉屋金夷
- 30日〔寄書〕＜思ひ内にあれば＞ 和胸散の本舗 前島和橋述

明治15年（1882）5月

2火〔寄書〕鼠を憎む 華睡庵塘雨／東喜坊先生の投書（去廿五日）の続き

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

- 3水〔寄書〕＜此ごろ或人より＞ 入谷村 杉田／己を知る 下谷 たま屋金夷
- 4木〔雑譚〕師心談（両心） 放誕子 〔寄書〕＜古い話しに＞ 雲鶴道人
- 5金〔雑譚〕有掛いり 澤上漁史 〔寄書〕＜山岡鉄舟君は＞ 麴町の麴生／雇人品定 鹿山人
- 6土〔寄書〕終りまで聴け 千峯狂生
- 7日〔寄書〕＜昨日下町の人が来て＞ 中坂 まとき生／きざな客人 郷台 柴江春
- 9火〔寄書〕雇人品定の続き 鹿山人／人の言は一概に信ず可からず 八日市場 小松
- 10水〔寄書〕読ぬ同士書ぬ同士 富田夏暁
- 11木〔寄書〕美色に迷ふ勿れ 深川 可津波／きざな客人（前号の続き） 郷台 柴江春
- 12金〔寄書〕不得已 下谷 玉屋金夷／転業は得策に非ず 苔の屋一心
- 13土〔雑譚〕師心談（遊心） 放誕子 〔寄書〕物の音 向島 机友処士／＜五月初の六日＞
上野山下車坂 藪内老虎
- 14日〔寄書〕＜培克といふ西洋人の言に＞ 中坂 まとき漫筆
- 16火〔寄書〕＜＊ガゼット新聞の文章「傘」を紹介＞ 向島 机友処士訳／＜東京の橋々には＞
前島和橋
- 17水〔雑譚〕隅田のけしき 澤上漁史 〔寄書〕勉強を怠る莫れ 苔の屋一心稿／我は色気を望
む 華睡庵塘雨
- 18木〔寄書〕雇人品定の続き 鹿山人／傘（前号の続き） 向島 机友処士訳
- 19金〔雑譚〕師心談（験心） 放誕子 〔寄書〕狡猾者流を歎じ兼て製造諸君に告ぐ 可愛楼晴
雪
- 20土〔寄書〕人を知る 下谷 玉屋金夷／＜昔し一人の善人あり＞ 駭爾生
- 21日〔寄書〕両針我腦を悩す 高島屋塘雨／傘（前号の続き） 向島 机友処士撮訳
- 23火〔寄書〕年若き婦人に忠告す 松蹊子／技能と品行は別なり 苔の屋一心稿
- 24水〔雑譚〕輦間の害 澤上漁史 〔寄書〕贅言一 可愛楼晴雪
- 25木〔寄書〕初鯉の下落 東喜坊／何故此様に苦勞性だやら 北 古三
- 26金〔寄書〕狗尾をもて貂に続く 猿楽町 間美家
- 27土〔雑譚〕師心談（験心の続き） 放誕子 〔寄書〕鯉の話 雲鶴道人／顕微鏡並に掛眼鏡の
注意 牛込 青木巖
- 28日〔寄書〕茶事は諂ひの稽古 高嶋屋塘雨
- 30火〔雑譚〕戯墨の設欄を喜ぶ 澤上漁史 〔寄書〕梁人猫を蓄ふ 宮川翁
- 31水〔雑譚〕ボン痴設欄の稟告 醉多道士／口上 梅我 〔寄書〕喧嘩片成敗 沈香亭主

明治15年（1882）6月

- 1木〔寄書〕ボンチ欄の口切 東喜坊／＜北条氏政が＞ 可愛楼晴雪 ＊ボンチ欄創設
- 2金〔寄書〕傘（但し日本の） 前島和橋戯稿／辞咎めをする勿れ 高しまや
- 3土〔寄書〕傘（前号のつゞき） 向島 机友処士撮訳／想像力の得失 猿楽町 混沌生
- 4日〔寄書〕博笑戯墨の悦び 向島 机友処士／空瓶の音高し 鈴木宮川翁
- 6火〔寄書〕ボン痴設欄のお悦び 和橋道人／東西同じこと 鈴木宮川翁
- 7水〔寄書〕流行漫録一 可愛楼晴雪／扇（前号のつゞき） 向島 机友処士撮訳
- 8木〔寄書〕想像力の得失（前段の続） 猿楽町 混沌生

宗 像 和 重

- 9 金〔寄書〕愛敬紀事 尾張 安井霞橋／旅行漫録二 可愛楼晴雪
 10 土〔寄書〕＜這は是れ英国学士メイナル氏が＞ 鈴木宮川翁寄す／＜蕃椒も喰ひ馴ては＞ 華
 すゐ庵
 11 日〔寄書〕詐偽の失敗 猿楽町 混沌生／＜天は万物を人に与へずして＞ 中坂 まとき漫筆
 13 火〔寄書〕旅行漫録三 可愛楼晴雪／手套（前号のつゝき） 向島 机友処士撰訳
 14 水〔寄書〕＜柳里恭の雲萍雜誌に＞ 郷台 芝江春／二神の来降 混沌生戯草
 15 木〔雜譚〕風流の主義 湊上漁史 〔寄書〕旅行漫録四 晴雪居士
 16 金〔寄書〕夫れ見た事か 深川 河童／贅言 横浜 松溪子
 17 土〔雜譚〕師心談（驗心）前号の続き 放誕子 〔寄書〕自家撞着 苔の屋一心稿／伊太利国
 喻話 在東京 伊太利人某
 18 日〔寄書〕大胆な学者 郷台 芝江春／＜下等社会といへば＞ 高島屋塘雨
 20 火〔寄書〕梅雨の長文 桃州居士／民情知らず 可愛楼晴雪
 21 水〔雜譚〕今昔の変り 湊上漁史 〔寄書〕読売の声価 宮川翁／世の中は送狼視すべし 混
 沌生戯草
 22 木〔寄書〕トホカミ講のとんだ御利益 太阿生／横浜にて千八百八十二年六月十七日 ウキリ
 ヤム、エド、クラムプトン
 23 金〔寄書〕榎木の興廃 八日市 小松／ものゝ如し 華睡庵塘雨
 24 土〔寄書〕喰はず嫌ひ 苔の屋主人／＜ハテ胸が悪いぞ＞ 向島 机友処士
 25 日〔寄書〕捻け者 礫川 可月生／＜ある獵人が＞ 中坂まとき
 27 火〔寄書〕労苦に慣る話 抱翠子
 28 水〔寄書〕無理死会社 繁野五郎衛門／予防論 向島 机友処士
 29 木〔寄書〕贅言第二 可愛楼晴雪
 30 金〔寄書〕東西同じからず 杞憂翁

明治15年（1882）7月

- 1 土〔寄書〕植木屋の悪弊 木公散人
 2 日〔雜譚〕鉄道馬車 湊上漁史 〔寄書〕鯉の生作り 苔の屋主人
 4 火〔寄書〕良薬 蓬風道人／友情 可愛楼晴雪
 5 水〔寄書〕仁心無きは人に非ず 高島屋塘雨／＜国民法に従ふの義務ありとは＞ 富輪喜来太
 6 木〔寄書〕あとの注意 八日市場 小松／＜氣候にや因けん＞ 外神田 かな井安善
 7 金〔寄書〕湯屋の開業 浮世 涼踏斎
 8 土〔寄書〕＜世の諺に死人に口なしと＞ 蓬風道人／贅言第三 可愛楼晴雪
 9 日〔寄書〕己惚れの失策 竹芝 蒼波生／名人 東喜坊
 11 火〔寄書〕＜衣は乱畳に因て＞ 中坂まとき／コレラ病予防概畧 土手三番町 伊能知大次
 12 水〔寄書〕コレラ病予防概畧 土手三番町 伊能知大次／乞ふまづ己れを省みよ 可愛楼晴雪
 13 木〔寄書〕芬吹の愚痴 華睡庵塘雨／コレラ病予防概畧の続き
 14 金〔雜譚〕凝固の説 醉多道士 〔寄書〕気を丈夫に持て 古礼羅山人／＜劇場の道具建を＞
 墨堤の逸民 南新二
 15 土〔寄書〕院本鏡山の原因附言 江戸溪 古樵

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

- 16日〔寄書〕風俗論抄訳 蓬風道人
 18火〔雑譚〕継子の嘆 湊上漁史 〔寄書〕不理窟 苔の屋一心稿
 19水〔寄書〕飾環（前号のつゞき） 向島 机友処士撮訳
 20木〔寄書〕名人探しの続き 東喜坊／＜古言に「老後知妬婦功」と＞ 静岡 桃杏史
 21金〔寄書〕困難は痼疾にあらず 富田夏暁
 23日〔寄書〕贅言第四 可愛楼晴雪／器械運転の忠告 八日市場 小松病中稿
 25火〔雑譚〕心しねかし 醉多道士 〔寄書〕御注意々々々 南新二 ＜余先づ年柳樽といふ＞
 高しまや
 26水〔寄書〕日本の名称 蓬風道人／＜衛生局で百方注意されても＞ 向島 机友処士
 27木〔寄書〕今猖々 可愛楼晴雪
 28金〔寄書〕裏店問答 富田夏暁／饒舌 蓬風道人
 29土〔寄書〕奇聞漫纂 鈴木生／＜此程愚は西洋の或る小説を＞ 一称杞憂翁と云ふ宮川翁
 30日〔寄書〕＜羊を亡して而して後＞ 中坂まとき／思ひ出す 銀街居士

明治15年（1882）8月

- 1火〔寄書〕コレラ病消毒薬用法大意 陸軍々医監 石黒忠恵述／朝鮮変報 銀街居士
 2水〔寄書〕コレラ病消毒薬用法大意昨日の続き 陸軍々医監 石黒忠恵述
 3木〔寄書〕コレラ病消毒薬用法大意昨日の続き 陸軍々医監 石黒忠恵述／風俗論抄訳の続き
 蓬風道人
 4金〔寄書〕定家の色紙 五本松 寄居虫菴／贅言第五 可愛楼晴雪
 5土〔寄書〕苦熱小言 可愛楼晴雪／博笑戯墨の両先醒に呈す 混沌生拌
 6日〔雑譚〕公私の得失 湊上漁史 〔寄書〕贅言第五の続き 可愛楼晴雪／＜或る清正公の奉
 燈に＞ 風柳閑人
 12土〔寄書〕散記々者を笑ふ 銀街居士
 13日〔寄書〕三たび朝鮮の話に及ぶ 可愛楼晴雪
 15火〔寄書〕蘭の説 五楓堂主人
 16水〔寄書〕＜秋とはいへど三番叟＞ 中坂まとき
 17木〔寄書〕＜迂生好んで英国学士ハーリス氏の文明論を＞ 京都 柳外逸史
 18金〔雑譚〕頑険を保守と為す勿れ 湊上漁史 〔寄書〕奢侈の弊害（前号の続き）
 19土〔寄書〕＜鉄道馬車が出来てより＞ 水道端一丁目 小島精一
 20日〔寄書〕鎮撫改進黨の利害を論じ以て朝鮮の頑民に寄す 向島 机友処士／奢侈の弊害
 （前号の続き） 柳外逸史又識
 22火〔寄書〕袖手傍観の時 南新二／虎列刺病の功能 可愛楼晴雪
 23水〔寄書〕絵画共進会 醉多道士
 24木〔雑譚〕厠の明放し 湊上漁史 〔寄書〕髭と陰囊との関係 苔の屋一心稿／盲象論 三々
 居士漫言
 25金〔寄書〕酒はお廃しにすべし 銀街居士／＜オイ助公イヤ助さん＞ 中坂まとき戯墨
 26土〔寄書〕都鄙の得失 不尽楼主人／贅言第六 可愛楼晴雪
 27日〔寄書〕鶏林の陋俗 千住 無丁子／都鄙の得失（前号の続き） 不尽楼主人

宗 像 和 重

- 29火〔雑譚〕一奢一吝 溷上漁史 〔寄書〕高島屋塘雨君の死を悲む 渡辺生／＜高島屋塘雨君は＞ 自由堂主人 前島和橋／＜千秋大人の遠逝を傷みて＞ 篁邨／＜＊高島屋塘雨追悼歌一首＞ 苔の屋一心 ＊元社員の投書家高島屋塘雨（野田千秋）26日に死去
- 30水〔寄書〕朝鮮の頑民に寄す（前号の続） 向島 机友処士／野田千秋君を傷む ＜＊二首＞ 中坂まとき／＜＊高島屋塘雨追悼句一句＞ 会田皆真
- 31木〔雑譚〕馬鹿の招牌 醉多道士 〔寄書〕漫言第一 不尽楼主人／＜高島屋大人の訃音を聞きて＞ 鈴木宮川翁／＜＊高島屋塘雨追悼句一句＞ 横浜野毛 凌宵庵主人／＜美男の聞えありし野田千秋君の＞ 琴通舎 康楽／＜露園先生のみまかられしを悼て＞ 浅草田甫 松本芳延／＜露園の千秋大人の身まかられしと＞ 外神田 かな井安善

明治15年（1882）9月

- 1金〔寄書〕空墓の寺参り 八日市場 小松戯稿／＜小生或士族さんの＞ 本石町 立原迂生
- 2土〔寄書〕気を大きく持て 元浜街 好晴山人／高島屋大人の逝去を悼む 下総八日市場 大川小松／＜＊高島屋塘雨追悼歌各一首＞ 東喜坊・不尽楼主人
- 3日〔寄書〕急がば廻れ 芝浦嘯月／コレラの嘯し 下谷 通新舎
- 5火〔寄書〕新らしいはなし 東喜坊
- 6水〔寄書〕秋夜の怪談 根岸の里 鈍我
- 7木〔寄書〕一針を呈す 不尽楼主人
- 8金〔寄書〕漫言 三々居士記／朝鮮の吉報を読て将来を戒む 可愛楼晴雪
- 9土〔寄書〕慳吝なお話し 奇板風也／新涼の祝辞 山下居士
- 10日〔雑譚〕善に服さぬ悪習 甕庭篁村 〔寄書〕贅言第七 可愛楼晴雪／つれづれの小言 横浜 宮川翁
- 12火〔寄書〕鉄道馬車設置も府民の勉強を走らせるの具 神田区 小沢藹石／かいまみ 向島 机友処士
- 13水〔寄書〕胃病者に告ぐ 本石町 立原迂生
- 14木〔寄書〕御注意 可愛楼晴雪
- 15金〔寄書〕大慾は無慾に似りの語の充用を質す 横浜 宮川翁
- 16土〔寄書〕＜浅草区馬道七丁目＞ 北島北洲
- 17日〔寄書〕朝鮮の頑民に寄す（前号の続き） 向島 机友処士／泥棒社会続編 可愛楼晴雪
- 19火〔寄書〕韓城門扉の画像 古樵翁／浮世医師 横浜 宮川翁
- 20水〔雑譚〕ジョサイナイ 溷上漁史 〔寄書〕風俗いそかし艸 外神田 かな井安善記
- 21木〔寄書〕朝鮮の陶器 南新二／贅言第八 可愛楼晴雪
- 22金〔寄書〕小学教則は土地の情況に因る 王子 斎藤八十次郎稿
- 24日〔寄書〕是がはなし 三々居士夢記
- 26火〔寄書〕貨幣の真理の良訳 春の屋 おぼろ
- 27水〔雑譚〕弱い者いちめ 醉多道士 〔寄書〕名実の反対 苔の屋一心／方円の心 中坂まとき漫筆
- 28木〔寄書〕土地自慢 根岸の里 鈍我
- 29金〔寄書〕＜＊絵画共進会について＞ 五色亭蕨丸／自由党に忠告す 山下居士

30土〔寄書〕 絵画共進会の幽冥会議前号の続き／＜往昔千の利休が＞ 南新二

明治15年（1882）10月

- 1日〔寄書〕 紙幣の講釈 春の屋 おぼろ
- 3火〔雑譚〕 臆測家を憎む 墨上漁史 〔寄書〕 喧嘩両清兵衛 滔々齋
- 4水〔寄書〕 ＜毎年芒種の頃より＞ 滝の川 紅葉亭鹿成
- 5木〔雑譚〕 改良 醉多道士 〔寄書〕 ポンポンポン 南新二
- 6金〔寄書〕 やりツぱなし 横浜いせ山下のしせん誌／世間此類多し 三々居士記
- 7土〔寄書〕 ＜世の中の事は一栄一枯＞ 中坂まとき漫筆
- 8日〔寄書〕 眼ざす説（一名妙な話） 可愛楼晴雪
- 10火〔寄書〕 風俗いそがし艸続き かな井安善記／閑話一則 山下居士
- 11水〔寄書〕 ほうき星 御門次郎
- 12木〔寄書〕 贅言第九 可愛楼晴雪
- 13金〔雑譚〕 ひとり言 墨上漁史 〔寄書〕 餅は餅屋 鹿山人
- 14土〔寄書〕 悪強情の人を憐む 富田夏暁／＜坊さんの事を出家といふ＞ 中坂まとき
- 15日〔寄書〕 郵便税増加の風説は偽か真か 可愛楼晴雪／＜西哲の語に＞ 三々居士
- 18水〔寄書〕 絵画共進会幽冥会議先月三十日のつゞき
- 19木〔寄書〕 絵画共進会幽冥会議続稿 五色亭／＜貴社新聞第二千二百九十九号＞ 熊谷 厚面
居士
- 20金〔寄書〕 絵画共進会幽冥会議の続稿 五色亭／人の短を言事勿れ己が長を語事勿れ 米々堂
- 21土〔寄書〕 虎列刺病全治者諸君に望む 三田 以真舞楽／＜愚老当夏より胃病と脚気症に＞
四谷老人 門脇五連
- 22日〔寄書〕 いそがし草のつゞき 外神田 かな井安善
- 24火〔寄書〕 蜂の詞 小日向 柴の家稻香
- 25水〔雑譚〕 龍鳳の夜壺 墨上漁史 〔寄書〕 湘南秋信 在相模 鈴木宮川翁／＜此頃貴社新聞
に絵画共進会幽冥会議と題し＞ 雨華莽抱一四世 酒井道一
- 26木〔寄書〕 偶感 可愛楼晴雪漫記
- 27金〔寄書〕 絵画共進会幽冥会議の続き 五色亭／物は無心こそ意味あれ 香取迂生
- 28土〔寄書〕 ＜四ツ谷に五六人の隠逸あり＞ 墨水 此君舎閑人／＜愚老が友人議論して＞ 四
ツ谷 門脇五連
- 29日〔寄書〕 紳士と貧士論 可愛楼晴雪
- 31火〔雑譚〕 文の林 墨上漁史 〔寄書〕 絵画共進会幽冥会議のつゞき 五色亭／秋夜の感慨
三々居士

明治15年（1882）11月

- 1水〔寄書〕 紳士と貧士論第二 可愛楼晴雪／邪宗画の弁白 浅草公園地 五姓田芳柳
- 2木〔寄書〕 此君舎翁に謝す 叢談会友 四ツ谷空々坊／紳士と貧士論第三 可愛楼晴雪
- 4土〔寄書〕 ＜同業相忌み同学相誹り＞ 村越向栄
- 5日〔寄書〕 道化手躍を觀て感あり 苔の屋一心／贅言第十 可愛楼晴雪

宗 像 和 重

- 7 火〔寄書〕＜ガチャリボカンやア旦那さま＞ まとき漫墨
8 水〔寄書〕＜漢土周の代に＞ 外神田 金井安善／鈍説 風雷舎北鳴
9 木〔寄書〕主義に邪正なし人に依て正邪分る 在築地 気楽居士／病の効用 太阿生
10 金〔寄書〕欲には限り有るべき事 竹の舎主人／いそがし草 外神田 かな井安善
11 土〔寄書〕欲には程の有るべき事（前号の続） 千束村 竹の舎／新聞記者の自分勝手 在崎
陽 初音谷
12 日〔寄書〕蛇頭龍尾 三田 以真舞楽
14 火〔寄書〕貧富の差別 一心迂夫
15 水〔寄書〕女礼式を読む 茶加四郎
16 木〔寄書〕警者仙人 根岸の里 鈍我／＜土に争友あれば＞ 四谷貧老 門脇五連
17 金〔寄書〕贅言第十一 可愛楼晴雪
18 土〔寄書〕朋友の色に溺るゝを誡む 青山南二 東今一／＜小生一タ劉向新序を読んで＞ 中
坂まとき漫墨
19 日〔寄書〕飼猫は食に飽しめよ 南新二／警者仙人の続き 根岸の里 鈍我
21 火〔寄書〕＜此ごろ或る人の許へ＞ 北桐鈴眼
22 水〔寄書〕自戒 青山南二 東今一
24 金〔寄書〕三年経てば三つ 五一居士
25 土〔寄書〕貴社貴記者に呈す 青山南二 東今一／＜中坂子つらつら世間の＞ まとき漫筆
26 日〔寄書〕娼妓も亦た地獄と謂ふべし 在築地 気楽居士／＜きのふの淵はけふの瀬となり＞
東喜坊
28 火〔雑譚〕むかし男 瀬上漁史 〔寄書〕絵画共進会の後談 二代目 高島屋塘雨／＜眼明き
千人盲目千人と＞ 下谷 溪車亭誌
29 水〔寄書〕贅言第十二 可愛楼晴雪／著者諸君に請要す 拈華微笑庵主
30 木〔寄書〕貧富無常 青山南二 東今一

明治15年（1882）12月

- 1 金〔寄書〕屋上制限法の苦情 苔の屋一心／おじやんとは結果の語に非ず 横浜しせん誌
2 土〔寄書〕＜近隣に餅屋あり＞ 中坂まとき／＜お母さん一銭お呉な＞ 花耕 穴史漫筆
3 日〔寄書〕菟麻草は蠅には毒藥なるの新説 大島盛造／牡丹餅素人手製上の巻 東喜坊
5 火〔寄書〕盆菊の説 青山南二 東今一
6 水〔雑譚〕世のすゝみ 瀬上漁史 〔寄書〕彼の倭者を悪む 可愛楼晴雪
7 木〔寄書〕牡丹餅素人手製上の巻追加 東喜坊
8 金〔寄書〕喰客の恥書 文福菴筆助稿／＜此頃大分絵画共進会審査の話が＞ 外神田 かな井
安善
9 土〔寄書〕雑説 向島 机友処士／すなどりおきな 拈華微笑庵
10 日〔寄書〕花競上野の絵合 戯久粹史稿／我が車夫仲間元政坊ではない貧乏症人壁書を作れ
り記して貴社に投じ以て一笑に供す 青山南二 東今一
12 火〔寄書〕新聞学問 可愛楼晴雪／娼妓果して地獄と謂ふ可き乎 鈴木六ツ丁子
13 水〔寄書〕眼を人に預ける 南伝馬町 竹の舎／花競上野の絵合前号の続き

読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）

- 14木〔寄書〕すなどりおきな（前号の続き） 拈華微笑庵
15金〔寄書〕再び貴社貴記者に呈す 青山南二 東今一
16土〔寄書〕＜親の馬鹿子に叱られて＞ 下谷 若丸／臨淵羨魚 無可有樓南柯居士
17日〔雜譚〕公等何をか求む 湊上漁史 〔寄書〕いそがし草 外神田 かな井安善／贅言第十
三 可愛楼晴雪
19火〔寄書〕牡丹餅素人手製下の巻 東喜坊／としのくれ 拈華微笑庵
20水〔寄書〕＜希臘の聖人ソクラテスの＞ まとき漫筆／クラの説 青山南二 東今一
21木〔寄書〕首尾共に見たし 気楽居士
22金〔寄書〕年末の五愁詞 三々居士／首尾共に見たし（前号のつゞき） 気楽居士
23土〔寄書〕＜維新以来我国の旧例古格は＞ 備後 圭峯生稿／すゝはたき 拈華微笑庵
24日〔寄書〕＜先月よりの早続きに＞ 神田連雀町 半鐘粟々生／雑話 蓬風道人
26火〔寄書〕すゝはたき（前号の続） 拈華微笑庵
27水〔寄書〕歳末の辞 可愛楼晴雪／歳暮 青山南二 東今一
28木〔寄書〕牡丹餅素人手製下の巻追加 東喜坊／雑話第二 蓬風道人
29金〔雜譚〕梅の一鉢 湊上漁史 〔寄書〕年もくれぬ 向島 机友処士

* 本稿は、平成二年度文部省科学研究助成費による「明治期新聞投書欄の研究」の一環としてまとめたものであり、続稿の予定がある。

（むなかた かずしげ 本学助教授 文学）